つり橋効果に、揺らぐ乳

きゅうり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
つり橋効果に、揺らぐ乳

【Ｎコード】
Ｎ７２４２Ｘ

【作者名】
きゅうり

【あらすじ】
吊り橋効果で揺れるのは、心情か、はたまたおっぱい。

（前書き）

どうも、この度はスカイプで有志と会話中、
「制限時間３０分で一作品書き上げよう、題材は自由！」
「じゃあ俺は、おっぱいで！」
「じゃあ俺も、おっぱいで」
というような会話が繰り広げられたため、
「じゃあ僕もそれに乗っかります」
というような具合で書き上げた短編です。

読み返してみたら、今回はちょっと文章がライトノベル寄りでしょうか。
さておき、一種のジョークとしてお読みいただけたら僥倖。

おっぱい、それはおっぱいである。いや、おっぱいでなければないのである。
「胸」だとどこか無機質な感じがして、人の温もりが感じられない。
かといって「乳」では気品の欠片も感じられず、中年を過ぎた小汚い親父がこれまた小汚い場末の居酒屋での会話で主に使われてそうで、下品なことこの上ない。
「乳房」になろうものならばそれは一生物学的用語にしか過ぎず、何の妄想が膨らむこともない、言語道断である。
もう一度言うが、おっぱいは、おっぱいでなくてはならない。
語感を含め、内実ともにおっぱいでなければならないのだ。

というようなことを、一緒に紅葉を見に来た大学のサークルの後輩に言うと、仮面のように張り付いた無表情な顔を変えず、また言葉を発することもせずに、おもむろに鳩尾辺りを目掛けて、充分に腰の捻りを加えた正拳突きが放たれたので、僕は地に平伏す形となった。
地面とお見合いをしながら咳き込む僕を、彼女はトドメを刺すかのように口撃した。
「先輩、とても気持ち悪いです。もしよければそのまま土に還って頂ければこれ幸い」
情け容赦のない言葉と、人体の急所である正中線上を精確に突いてきた拳により、言うまでもなく後者の単純な暴力が原因であるが、僕は反撃する気力を持ち合わせないままに、ひたすら地面に向かって嗚咽を繰り返した。
「なんとか言ったらどうですか、先輩。どのような思索の末に先の言葉に至ったか分かりませんし、理解するつもりも毛頭ありません

が、言い訳ぐらいは聞いてあげますが」
死体に鞭打ち、死体蹴り、オーバーキル、死人に梔子……はニュアンスが違うけれど、そんな様々な言葉の羅列が頭を巡ったのだが、僕が苦心の末に発した言葉は、
「１１９番をお願いします……」
という力無い言葉だけであった。
「１１０番ですか。あ、先ほどのセクハラを悔恨して自首しようと言うのですね。それは殊勝な心掛けで何よりです。今すぐ警察を呼んでさしあげます」
「いや、救急車をお願いしたいのだが……」
「近年、本当に救急車が必要ではないのに、安易に救急車を呼ぶ不届き者が多いそうですよ、先輩」
確かにそのような社会問題はテレビのニュースで見たことはあるし、緊急の場合以外に救急車を呼ぶという選択肢を取る者に対して批判的なことには僕自身も相違ない。けれど、いつまで経っても止まらない涙とこの咳き込み具合は、客観的に見たら救急車が必要たる水準に達していると判断しても良いのではないだろうか、と僕は思う。
やがて血か臓腑でも飛び出すのではないかという勢いで咳を続けた僕を見兼ねたのか、彼女は僕の背中側にそっとしゃがみこんだ。
そうだ。何だかんだいって、彼女は優しいのだ。優しい人間なのだから、きっとそっと背中を撫でてくれるに違いない。
と、思ってたのだが。
四つんばいの形を成す僕の背中を、鈍いとも鋭いとも付かぬ、重みのある物理的衝撃が襲った。
痛ぇ！
人間切羽詰ったときほどシンプルな言葉しか出ないものだ、それはただただ痛かった。
何が起こったか分からないまま、いよいよ僕が地を這い蹲ってあたかも蠢動する芋虫のような体勢になったところで、さきほどより

一段高いところから彼女の声が降ってきた。
「さっきは前を殴ったので、今度は後ろから殴れば、その鬱陶しい咳が治まるかと思って」
何の悪びれる様子もなく彼女はそう告げた。
ふむ、シリアルキラーという、凶悪犯罪を犯すものには生まれ持った殺人衝動を持つ人間がいるということを聞いたことがあって、正直僕はそれを眉唾ものだと思っていたが、考えを改めざるを得ないようだ。彼女は間違いなく、素質ある人間だと思った。
視界が揺れる。
僕が揺れているのか、世界が揺れているのだかわからない。
けれど、脳は明晰で、思考状態は鮮明である。
そうだ、そういえば僕はつり橋の上に居たんだった。
どういう行動を取っても彼女から追撃されると思った僕は、あえてつり橋の上に伏したまま状況整理を続けることにした。
そうだ。
紅葉を見に行こうという口上で彼女を誘い出し、もちろん事前に下調べをして置いたこの渓谷のつり橋を使うことにより、かの有名な吊り橋効果で彼女を落としてやろう、という作戦だった。
けれど。
実際には、僕の方が橋に腹を落とす羽目になってしまった。
なぜそんな羽目になったのか。
そう。
吊り橋の上で欄干から眼下に流れる川を見下ろしながら、ポツリポツリと少ない言葉を交わし、良い雰囲気になったな、と思っていざ告白しようと彼女の方を横目でチラリと見やったときに、彼女の潤沢なおっぱいがこれまた吊り橋効果によって、たゆんたゆんと揺れているのを目撃してしまい、ついついおっぱい談義を始めざるを得なかったわけである。
その結果がこれである。
やれやれ、といったところだ。

「あれ、先輩死んでますか」
と、状況整理すら冷静にする暇を与えられず、彼女のつま先が僕の横っ腹を突き刺した。
普通そこは生きてますか、ではないでしょうか、という疑問をぶつける前に、彼女の追撃を恐れて僕は、立ち上がった。
「あ、生きてましたか。そうなんだ、生きてたんですね」
妙な含みのある言い方が気になった僕だったが、ものの十数分の間に暴力に対する恐怖をスティグマのように身体に刻みつけられた僕は、あえて何を言うこともしなかった。正確には、出来なかった。
「そういえば、咳、止まりましたね」
「あ、ほんとだ」
「私に感謝してくださいね、先輩」
彼女の追撃が功を奏したのかは謎であるし、そもそもの発端を招いたのは彼女であるからして、僕が彼女に感謝する理由が無いのは明白だった。もちろんそんなこと、口には出せないけれど。
「あ、先輩見てください。川に何か大きな魚が」
彼女はすでに僕に対する興味を失って、というか元々あったのかすら謎であるが、眼下の川に再び視線を戻していた。
なるほど、確かに何かしらの大物の気配が、澄んだ川の表面からうっすらと見てとれたが、一方で僕の気持ちは、関心と視線は、彼女のおっぱいに集中した。
幸いにも彼女は川底の魚に夢中なようで、僕の視線には気付かない。
彼女のそれは、橋の僅かな上下に期待以上の反応を示して、やはり大きくたゆんたゆんと揺れていた。
なるほど、確かに元来の効果は確かめられなかったが、吊り橋効果も悪くないと思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7242x/

つり橋効果に、揺らぐ乳

2011年10月19日05時27分発行